

## 令和2年度 奈良市立都跡こども園 研究実践概要

園長名 山中 理恵子  
全園児数 147名

1. 研究主題 “したい” から始まる子どもの遊び  
～一人一人の子どもの心の動きを見つめる～

2. 研究年度 2年度

### 3. 研究主題設定理由

初年度の研究で、“したい”と下図のように心が動く中で、子どもたちが何に心を動かされ、どんな面白さを感じているのかを読み取り、子ども理解に努めた。“したい”思いが変化する過程には、子どもたちのいろいろな気付きや学びがあり、それを受け止める保育者の存在や環境が深く関わっていることがよく分かった。さらに今年度は、“したい”思いが変容していく中で、何が要因となっているのかに着目し、分析していくことにした。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

- ・遊びの中で、主体的にもの・人・ことに関わり、“したい”思いがどのように変化し、その動いた要因は何なのかを探り、自ら遊びを創る子どもを育てる。

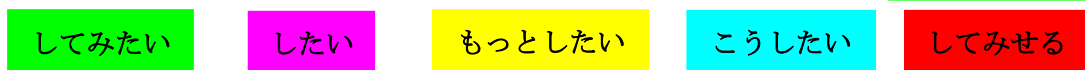
#### ②研究の重点

- ・子どもたちの心の動きを探り、学びを読み取り、子ども理解に努める。
- ・研究主題に沿った各期の事例を持ち寄り、心が動いた要因を年齢ごとに分析する。

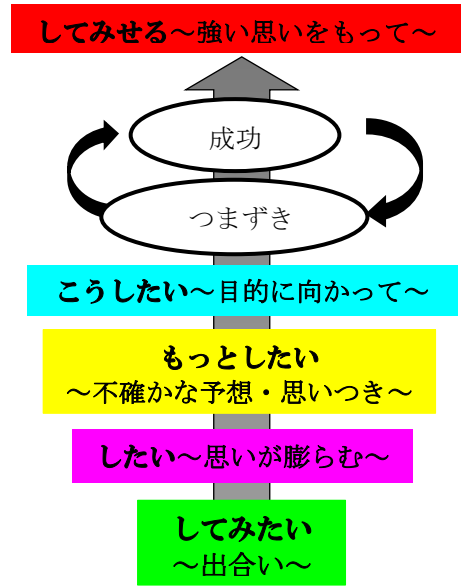
#### ③活動の方法

- ・各学年ごとの実践事例を、子どもたちの姿から“したい”思いがどのように変化し、その要因となったものは何なのかを以下のように示し、分析した。

#### 【 心の変容 】



#### 【 心が動いた要因 】



### 〇3歳児（6月） 事例1「みつけたよ！」

6月中旬頃から、園庭のいろいろな場所でダンゴムシ探しをすることを楽しんでいました。保育者と一緒にいつものように飼育ケースを持って、ダンゴムシ探しをしていたところ、トマトのプランターの近くにカエルがいたのを見つけた。A児がすぐにカエルを手でつかみ、保育者に「カエルいたー！」と、笑顔で知らせ、①「ホントだ！すごいね」と同じように笑顔で伝えると、捕まえたカエルをみていたA児が泳ぐようなジェスチャーをしながら「タライに入れよう！」と、目についたトマトのプランター近くにある水がはってあるタライに入れようと

#### 【親しみやすく扱いやすいダンゴムシ】

- ・噛まない
- ・つかみやすい
- ・身近にたくさんいる

#### 【目の前の安心できる場所】

- ・子どもの発見を全て受け止めてくれる保育者が側にいる

すると、逃げてしまった。側でみていたB児が保育者に「これ(プランター)の下いった!」と話すので、プランターをずらすと、ダンゴムシがいた。C児「あ!ダンゴムシ」と、**ダンゴムシを捕まえて飼育ケースにいれたり見つけたりして喜んでいる**と、チョウが飛んできた。すると、A児が「あ!チョウチョ」と、目の前を飛んでいくチョウを追いかけていくと、C児「あ、僕も!」と、ひらりと舞うチョウのあとを追いかけることを楽しんでいた。

【側にあるもの】  
 ・普段から見慣れている水が入ったタライがある

【今までの経験】  
 ・未就園児クラスの際に、飼育ケースに入った虫を見ていた  
 ・数日前からダンゴムシ探しをしていた



《考察》

園再開時期に、安心して過ごすことを大切にしたいと考え、保育者との関わりを積み重ねてきた。その中で興味のあるダンゴムシ探しを始め、偶然見つけたカエルやチョウに心が動いた姿が見られた。子ども達の面白いと感じたことに同じ目線で保育者が寄り添ったことで、“捕まえない”“見たい”“触れたい”などのそれぞれの“したい”に繋がった。目の前のもの・ことに興味をひかれていく子ども達の姿から、生き物が身近にいる園の環境や、身近にいろいろな用途がわかりやすい用具や道具が、思いのまま引き寄せられて“してみたい”“したい”という子どもの姿に繋がることが分かった。

○4歳児(11月～)事例2「モスバーガー食べたくなってきた!」

机とすり鉢やおろし器、すり棒などの様々な用具を分類したワゴンや野菜や果物の皮、花、実などの素材を囲むように並べた場に、「今日もジュース屋さんしよう!」と、**数名の子どもが集まり、それぞれが思い思いに用具や素材を選んでジュースをつくり始める**。保育者は、子どもが必要としているものが足りているか確かめながら、側で見守る。

【机、用具、素材の配置】  
 ・友達を感じ、使いたいものがすぐに手に取れる場の構成

A児は、「抹茶にするねん」と葉を乗せたおろし器を、**カップに乗せ「ゴリシュッ♪ゴリシュッ♪ゴリシュッシュッ♪」**と、笑顔でリズムカルに口ずさんでいる。思わず保育者も一緒に口ずさむ。

【いろいろな用具・素材】  
 ・今までの経験から用具や素材の選択  
 ・不確かな予想、思い付きのまま試して遊べる

B児は、すり鉢に入れたお花を手ですり潰しながら**「色が出て来た!」**と、**少しずつ水を足しつつ**、A児の様子を見ながら「入れようか?」と、水を継ぎ足している。①「水を少しずつ入れてるんだね」と、B児の工夫していることを認める。

【友達とのやり取り】  
 ・家庭での経験から思い付いたことを話す中で、“もっとしたい”ことを見つけていく

C児は、**ピンクのお花でつくった色水をふるいに通し、「これしたら綺麗なジュースができた」**と、嬉しそうに透明のコップに入れて見せる。①「本当だ!綺麗なだね」と、コップを持ち上げて透き通っていることを強調しながら驚く。

【豊富な種類(形、色)の素材】  
 ・工夫したり見立てたりなど存分に試すことができる

つくったジュースを並べていると、違う遊びをしていたD児が「わぁーめっちゃ綺麗だし、可愛い〜」と、声をかけた。すると、D児とE児が**「すみませ〜ん!ジュースください」**とお客さんになった。やり取りが始まると、違う遊びをしていたF児が様子を見に来た。D児が、たかさんのジュースを飲む真似をした後「ジュース飲んだら、**モスバーガー食べたくなってきた!」**と呟くように言う。①「Dちゃん、モスバーガー食べたくなってきたんだって!どうしよう?」と、一緒に考えつつ、子どもたちの考えを待つ。すると、C児とF児が慌てて素材の所に向かう。**白菜の白い部分をちぎり、落ち葉を挟んで「どうぞー!モスバーガーです」**と手渡しすると、D児は目を丸くして「めっちゃモスバーガーやん」と受け取り、食べる真似をした。①「すごーい!モスバーガーだ!」と、両手を叩いて一緒に喜ぶ。**D児「ポテトはないよなあ?」と尋ねる**。笑いながらC児は「細長いのを探さなくっちゃ!」と、にんじ



んの皮や花の茎を手に取りつつプランターを眺めている。花の茎を気にしている様子だったので、プランターから使ってもいいことを知らせる。C児は、プランターから茎をちぎると、「箱ないかな？こんなに入れたら見えそう」と、指で形をつくりながら保育者に話す。保育者は、保育室にあるお菓子の空き箱をすぐに用意し、本児にイメージを聞き取りながら形に切って渡す。保育者が用意した箱に茎を入れると嬉しそうに「おまたせしました～ポテトです」と、D児に渡すと「うわあ！本物みたいやん！すっごー！」という反応を見て、喜んだ。

【さりげなく支える  
保育者の存在】

- ・思い付いたことを受け止める
- ・思いを汲み取り、実現できるようにタイミング良く援助する

#### 《考察》

机やワゴン、素材を囲むように配置することで、友達を感じ、すぐにもものが手に取れる遊びたくなる環境となった。友達とのやり取りがきっかけで、ジュース屋さん、モスバーガーづくりと、もっとしたい思いが膨らんでいった。いろいろな素材が身近に選択肢として側にあったことで、選んだり工夫したりして見立てる中で、本物らしくするために“こうしたい”という思いが出てき始めた。保育者が、試したり工夫したりする一人一人の思いを受け止めることはもちろん、子どもの思いを汲み取り、タイミングよく思いが実現できるように援助したり環境を再構成したりすることが“もっとしたい”“こうしたい”と心を動かして遊ぶことに繋がっていることが分かった。



#### 〇5歳児（11月） 事例3「なんでなん!？」

ツルムラサキでいろいろな色水づくりをする中でふとA児が「Bちゃんの色濃いね」と、友達のつくっているものと比べ始めた。「ツルムラサキ4個しか入れてないで」とB児。「私3個入れてんけどなあ」とA児。(A児の方がだいぶ色が薄い)「1つ違うだけでこんなに色変わるん？」と二人で不思議そうに色水を見つめている。「じゃあさあ、1つずつツルムラサキ増やしてジュースつくってみよ」とA児が提案する。B児も「いいやん！取りにいこ！」と二人で実を集めに行く。

【身近にあるツルムラサキ】

- ・色が出やすく、豊富に実り、扱いやすい
- ・すぐに取りに行ける場所に栽培している

【興味が同じ友達の刺激】

- ・友達と話したり比べたりできる

いろいろな大きさの透明カップを用意し、その中に実を1つずつ増やしながらいれ、つぶしてみた。1つでは「全然色付かない」、2つでは「ちょっと紫になった??」と、10つまで試してみた。それぞれつぶしたものを横に並べて比べてみると、1番色が濃かったのが4つ入れたものだった。「何で?」「なんでなん!?!」「10個の方が多いの」と、目を丸くしながら手で持って比べている。その日の遊びの後の話し合いで「数が多いのに色が薄いのは何でだろう?」と投げかけ、保育者も一緒に悩んだが、答えは出なかった。

【予想との相違】

- ・自分達の予想と異なった結果から疑問をもつ

【共に悩む】

- ・遊びの後の話し合いで周りにも知らせ、投げかける機会をもつ

次の日も置いていたカップを見比べながら考えていた。すると、B児がひらめいた様子で「まって！これ水の量じゃない?」と話し、「えっ?どういうこと??」とA児が聞いた。「お水がいっぱいになると薄くなるねん。だからお水の量いっしょにしたらいと思う」とB児が話した。「そっか、じゃあお水いっしょにしてやってみよう」と、同じカップを持ち、水を入れてみた。ところが、うまく同じ量にならない。「なかなか同じにするのできないわあ」とB児。①「同じにするためにはどうしたらいいのかな?」と投げかけると、A児が「私いいの知ってる!」と砂場の遊具置き場に駆け出し、「これでしたらいいで」と、計量カップを持ってきた。「お料理するときママが使ってるねん」と、A児が嬉しそうに伝える。早速「ここ(100のメモリ)まで水いれよう」と水を入れ「ほら、できたで」とA児。はかることができた。「これで同じお水でできるわ」と、ツルムラサキを探

【相談できる友達】

- ・気付いたことを伝え合える友達の存在

【大きさの異なる透明のカップ】

- ・水の高さが違うことで量の違いに気付く

【遊び慣れた用具】

- ・家庭での経験、知識をいかす
- ・自由に試せる用具の豊富さ

しに行き、また試していた。

水の量を同じにして実の数を変えてつぶしてみた。ところが A 児と B 児が思うような色の変化はなかった。「何でやろう？」とカップを見比べたり、実を触ったりしながら考えていた。すると A 児が「分かった！実の大きさが違うからや」、B 児も「そっか！大きい方が色いっぱい出るもんね」と気付いた。「同じくらいの実やったら絶対できるで！」と、実を取りに行き試してみることにした。

【不思議に迫る】

・ 思考する十分な時間、場所がある

【なぜを知るための試行錯誤】

・ 思い付いたことが何でもできる

#### 《考察》

ツルムラサキ 1 つでどれほど色が変化するのかに疑問をもったことが心を動かすきっかけとなり、水の量や実の大きさなどに着目した。なぜ違ったのか不思議を探求する中で、“こうしたい”と目的に向かって友達と思いを伝え合いながら試行錯誤を繰り返した。そして、これならできる、“してみせる”と自分たちの考えたものを絶対つくりたいという強い思いに変化していった。なかなか思うようにいかない時に、子どものしたい思いを見守り、子ども自身の考え、思いを引き出す十分な時間と、必要に応じて考えるきっかけになるような声かけをすることが“こうしたい”“してみせる”と心を動かし、主体的に遊ぶ姿へと繋がることが分かった。



## 5. 研究の成果

- ・ 3 歳児は、保育者との信頼関係を築きながら、園で安心して過ごせるようになってくることで、自分の側や目につくもの、瞬間的に興味をひかれたものとの関わりを楽しむ姿があった。その都度、子どもと同じ目線で発見や思いを受け止める保育者が側にいることで、より“してみたい”“したい”という姿に繋がることが分かった。
- ・ 4 歳児は、友達との関りに喜びを感じつつも、自分のしたいこと楽しんでいる姿があった。そのことを踏まえ、友達存在を感じられるような机の配置や場の構成、使ってみよう！これがあるからしたい！と思えるような用具や素材が近くにあることで、“したい”と遊びたくなる要因になった。その中で、豊富な種類の素材や友達とのやり取りがあることで、“もっとしたい”“こうしたい”と心を動かすことに繋がっていった。また、保育者が一人一人の思いを受け止め、4 歳児の発達段階を踏まえつつ、タイミングよく援助することも大きな要因の 1 つであることが分かった。
- ・ 5 歳児は、友達と一緒に“こうしたい”と同じ目的に向かって自分たちなりの予想をしながら遊びを進め、予想と異なる結果や不思議に感じたことをきっかけに探求していく姿があった。今までの経験や友達の刺激からきっかけを掴み、思い付いたことをなんでも、何度でもできる環境が心を動かす要因になった。また、思考する十分な時間や子ども自身の考えを引き出す保育者の待つ姿勢が、子どもの新たな考えや気づきを促し、“してみせる”という強い気持ちに繋がることが分かった。

## 6. 今後の課題

子どもの心の動きを見つめ、“したい”の思いの要因を探ることで、子どもに寄り添い、同じ目線で思いを読み取る大切さを改めて感じた。引き続き子どもの思いを読み取ることに努力し、そして“したい”の思いを支える発達に応じた援助や環境構成を探っていきたい。